

## 第5回 まちづくり戦略ビジョン審議会 都市構造部会 議事録

日時 平成24年(2012年)9月27日(木) 13:30～15:30  
会場 ホテルニューオータニ札幌 2階 北斗の間

### 【出席者】

部会委員／小林部会長 田村委員 志済委員 丸山委員  
札幌市／政策企画部長 企画課長 計画担当課長 企画担当係長  
都心まちづくり課長 交通計画課長 都市計画課長 環境計画課長  
エコエネルギー推進課長 みどりの活用担当課長

### 議事内容

---

#### ●開会

##### 【浅村計画担当課長】

定刻となりましたので、第5回都市構造部会を開催いたします。本日は近久委員、並びに村木専門委員がご欠席となっております。

本日は、重点戦略の骨子、第7章の内容についてご議論いただきたいと思います。以降を部会長にお願いいたします。

##### 【小林部会長】

しばらく間が空きましたので、手元の議事録を見ながら確認していきたいと思います。

まず、重点戦略の考え方を第1の議論としたいと思いますので、事務局の方から説明をお願いいたします。

#### ●議事

##### (1) 前회のご意見とその対応方法について

---

～資料説明～浅村計画担当課長

- 資料1 第4回都市構造部会でのご意見と対応の方向性

##### (2) 重点戦略 一環境一 骨子(案)

---

～資料説明～浅村計画担当課長

- 資料2-1 重点戦略 一環境一 骨子(案)
- 資料2-2 重点戦略 一環境一 骨子(案) 新旧

#### 【小林部会長】

ありがとうございました。少しじっくり目を通していただきながら全体の枠組みと部会が主に議論する7章の考え方についてご指摘、あるいはさらに考えていくべき事項が盛り込まれているか、付け加えるべきかをアドバイスいただきたいと思います。

資料の1と2の内容は本日まで出席いただいている部局の方のご了解を得ているものと理解してよいでしょうか。

志済さん、これからのことを的確に捉えて考えなければならないこととして、資料2にあるスマートシティ、スマートコミュニティについて海外の方と議論しても概念が非常に不明解であると感じています。

また、スマートという言葉は市民の方に意図通りにご理解いただけるかが気になるころではあります。札幌が意味するスマートシティの内容はきちんと打ち出す必要があり、それは札幌の特徴になると思います。自然との共生、大都市であること等を踏まえて、一般用語としてではなく独自性のあるものとしてとらえるにはどうすべきでしょうか。

#### 【志済委員】

全国的にスマートハウスや、スマートシティ等、スマートという言葉が使われている風潮があります。札幌市は環境首都宣言の際に二酸化炭素の問題を特出ししており、特に札幌市は民生部門、交通部門における排出量の課題が非常に大きく、その視点からは目指す方向は明確であると思います。

家庭のCO2対策等が盛り込まれていることが大事なのではないでしょうか。

ヨーロッパでは化石燃料に代わるエネルギーへの転換が大きな課題となっています。札幌の特徴を生かしたエネルギーの創出ということも今回記載されていますので、これは積雪地ならではの特徴になるのではないのでしょうか。

スマートシティということについては、公共の安全であったり、災害であったり、都市によって課題は異なりますので、何でもかんでもスマートということではなく、札幌における「スマート」とは何かをきちんと押さえる必要があるかと思います。

持続可能といった際に、色々な意味があるかと思います。交通、社会インフラの話題もあったかと思います。持続可能ということは長期に亘るメンテナンスとそれに係るコストについても考える必要があります。例えば、交通網をとっても、道路を広げればよいということではなく、2030年頃には大幅な修復のタイミングが来るということがご説明にありましたが、その際に財政的に耐えられるような持続可能性を考える必要があるかと思います。

エネルギーについて言うと、前回、「公共施設において先行的な取り組みを」ということで発言させて頂き、資料に反映していただきました。いわゆるBEMSについては、企業

側ではかなり積極的に推進していく動きがあります。それに遅れない形で公共施設におけるマネジメントシステムの導入というものを積極的にご検討されることをお勧めしたいと思います。

**【田村委員】**

地域構造的な部分はすべて環境で受けるという理解でよいでしょうか。

**【浅村計画担当課長】**

地域コミュニティに係る戦略については地域部会の方で検討しています。

**【田村委員】**

サステイナブルな土地利用と交通を考えた場合に、地域コミュニティも大きく関わってきます。前回は議論されているように、東アジアの中での国際都市札幌というところの位置づけと結びつく部分もあり、経済面からの都市構造の在り方も明確にする必要があります。

地域コミュニティと都市構造、経済と都市構造、その間をつなぐテーマとしての都市構造の在り方を議論していると理解しています。

今日の計画づくりの中で求められるのは、将来的な変動にも対応できる柔軟性であり、現場の対応も含めて表に出ることだと思います。市民もそれを望んでいると思います。環境を重点戦略として掲げた時に、何から始めるのか、一番の目玉が何かが伝わらず、総花的な印象を受けています。

**【浅村計画担当課長】**

重点戦略として地域、経済、環境の3つの視点において重点的に取り組むべきことを明らかにし、それを受け止める都市構造の在り方を論じていきたいと思っています。

マクロ的な視点、コミュニティ的な視点、それをつなぐ視点が求められますが、それについては計画書の内容で留意して記載していきたいと思っています。

方向性が見えづらいという指摘については、我々も庁内では短期的な取り組み、中長期的な取り組みの具体的な事柄も議論しております。視点としては、このような内容で整理しつつ、もう少しロードマップ的な表記についても示して優先順位を検討していきたいと思っています。

このままの内容ではまだ整理が足りないということは理解したうえで、今後、調整、検討していきたいと思っています。

**【小林部会長】**

特に後の方の議論についてはこの部会で本来議論すべきことだと思いますが、これま

で手を付けずにおりました。関連部局内部でも十分な議論ができていないと思います。残されている時間がそれほどない中でかなりリアルに議論していく必要があると思っています。宿題として、今後、庁内を含めて深く議論するということを確認したいと思います。

前半の内容については、例えば、同じ政令市の福岡と比べると、福岡は以前から東アジアをターゲットにチャレンジを進めています。向こうも総合計画を検討していますが、東アジアのビジネスハブということを目指して民間との議論を進め、それに相応したライフスタイル、インフラを検討しています。

札幌が同じく、東アジアをターゲットにした場合に、福岡と同じ議論をするのか、違うベクトルを組み込みながら議論するのかということも検討が不十分でしょう。それがないと、戦略の方向性が見えず、民間の金、国の金を引き込む際に、福岡と札幌のどちらが投資対象として魅力的か、そのためのリアリティが必要なのではないのでしょうか。自分たちで積み上げてきた議論が競争力を備えているのかを自己反省しながら、残り時間の議論を進めていただきたいと思います。

#### 【丸山委員】

印象をお話すると、今回、分野のタイトルを新しくしたこともあり、スマートな都市の構築ということが示されました。環境首都さっぽろと大差がないというのが率直な感想です。10年の計画ですから、環境首都札幌を確実に実現するということを明確に書いた方が良いのではないのでしょうか。

前回の部会の際にも部会長の方から、まちづくりの中でもトリアージの必要性をお話いただきました。今回の10年の計画ということではもう少しターゲットを明確にして重点化を図るべきではないのでしょうか。

戦略として何か一つを取り上げてまずは、それを実行するというプロセスを作るというやり方の方が良いと思います。それは、10年という期間であること、市民と共有する計画であることが理由となります。そうすることで市民活動、企業活動も一緒に参画して巻き込みながら推進することができる、連鎖できるという力の集結イメージが付きやすいのではないのでしょうか。

#### 【小林部会長】

もうひとつ感じることとして、札幌は広域も含めると200万の人口を抱えており、10年後であれば、それほど変わらずに存在していると思います。

今回考えなければならないビジョンとは20万、25万の街のビジョンではありません。都市の中でたまたま10区に分かれていて、それぞれの区の多様性、周辺エリアの特徴がベースになって200万人の都市圏を形成しています。

持続可能性、コンパクトということを見ると、20万や30万の都市で考えること、

例えば青森や富山で考えることとは全く違います。小さい都市で議論していることが大都市に適用出来るかという点必ずしも同じ論理ではありません。

今日、比較的成功事例として取り上げられているのはそうした規模の都市であり、それをそのまま札幌に適用できるものではないと思います。

前回の都市マスではコンパクトシティの議論をしてきました。

その際には逆線引きして市街地面積を小さくするという点も話題として出てきました。小規模な都市であればそれも可能であり、ヨーロッパで論じられているコンパクトシティはまさにこれに近いのですが、それが札幌では鵜呑みできるものではないと思います。

エネルギー消費を抑えたコンパクトな市街地を形成するという点に、都市が縮退するという点とイコールではありません。それぞれのエリアの特徴あるライフスタイルのモザイク、たくさんのももの集合が一つの姿を作っているという点を頭出ししなければ、これからの新たな都市マスも同じような議論をされるのではないのでしょうか。

200万都市としてのコンパクトシティの在り方についてはかなり言葉遣いに気を付けなければならないのではないかと思います。

#### 【志済委員】

経済のグループで、北海道新幹線に対する多大なる期待については良く耳にします。いろいろな議論が拡大路線で進められていた時に、ここで論じている環境とは相反するものとなるかと思っています。

経済を発展させるまちづくりと環境負荷を低減するまちづくりの共存は難しく、かなり高度なマネジメントが求められます。経済分野と整合したときに、調整が効くのかどうかということが気になりました。

#### 【小林部会長】

都市計画で全体の土地利用の議論をしているかと思いますが、その中では経済の受け皿としての議論をどのように進めているのでしょうか。

#### 【米田都市計画課長】

経済の方は専門でないのでピント外れなお答えになるかもしれませんが、コンパクトシティとして集約化を図ることを志向しつつも、一方では現実的に郊外住宅地が歯抜けになりつつある中で、そこでの生活も守らなければならないというジレンマも持っています。マクロとミクロの使い分けが必要とされるということを意識しつつ、新たなものの創造と環境負荷の低減の矛盾も感じながら議論していく上では、経済も土地利用も共有しているところがあるかもしれません。

経済だけを見て都市計画を考える際のポイントを明確にする必要があります。多様な

生活スタイルがある中で、その多様性を認めていくというときに、部会長がおっしゃったように、モザイク、パッチワークという考え方があるかと思います。全てを中心に寄せるのではなく、良好な郊外の住宅地のライフスタイルを認めながら、集約化を目指していくことが必要になります。先を見る意味で、方向転換の舵を切る重要な時期にあるのであらうと感じています。都市マスの検討の際の参考にしたいと思います。

【小林部会長】

今、土地利用の見直しの視点を改めて考える際に、低炭素型ということが一つのキーワードになっています。それは負荷を掛けないということで、そういう産業構造を目指そうとするものに結びつきがちですが、今、世界で使おうとしている言葉としては、「低炭素型の社会」「低炭素型の都市」「低炭素型のライフスタイル」というものに変わりつつあります。低炭素型の交通に移行する、低炭素型のライフスタイルへの意向ということでは快適性を失わずに熱源の転換等を図るということになります。

低炭素型という言葉積極的に捉えて産業やライフスタイルと結びつけて新しい価値観につながるような意味で言葉を選んでいく必要があると思います。

負荷を掛けない土地利用ということではなく、低炭素ということを視野に入れるべきではないでしょうか。

【田村委員】

今の市長を含めて、「市民」という存在を非常に重視していますが、海外では、まちづくりにおける合意形成は必ずしも市民に限らないということが議論されています。札幌市が戦略的に様々な主体とネゴシエーションしていく、もっと市民も戦略の玉として意識変革していく必要があるということ部会長がおっしゃっているのではないかと思います。土地利用についても環境についても、市民にとどまらず様々な主体とネゴシエーションしていくということを意識すべきではないでしょうか。そういう意識変革が市民にも求められるのではないでしょか。

【石川政策企画部長】

まさにその通りで、市民、企業、行政という視点でいきたいと思います。4次長総までは、行政計画として総合計画を構築してきましたが、今回の戦略ビジョンはまず、市民の皆さんをはじめ経済界等、様々な団体との意見交換を経て議論が佳境を迎えているという状況にあります。そこで1～5章は市民計画として明確に位置づけています。未来の望ましい姿の中にも市民、企業の役割を明記しています。

【小林部会長】

ほかになければ、次に進みたいと思います。

### (3) 第7章 将来の都市空間像(案) 一構成案一

---

～資料説明～浅村計画担当課長

#### 【小林部会長】

再度確認となりますが、この内容については関係部局との調整済みということでしょうか。この部会で、十分な議論を部会員の皆さんの持つ知識を総動員したのになっておりません。

我々の立場から見て、もう少し突っ込んでほしい、ということをお他部会には投げかけていきたいと思っています。

関係部局の皆さんは、それぞれのお立場、この7章をどうお考えなのか、まずお聞きしたいと思います。

#### 【米田都市計画課長】

私の立場から言うと、都市マスとの関係を意識しています。非常に悩ましい部分も含めながら議論をしていますが、もう少し頑張る必要があると思います。

もう少し、低炭素、コンパクトというものの定義を明確にしつつ、目指すところを明確にし、如何にオペレーションしていくのかを分かりやすくしていく必要があると思います。

#### 【高木環境計画課長】

正直なところ、7章の都市空間像の部分には深入りしておりませんでした。重点戦略の中ではいろいろと議論してきましたが、先ほどの議論にもありましたが、低炭素社会を目指すときのベクトルとして、従来の環境負荷という面にとどまらず、3.11以降の安全性や経済面も視野に入れるべきであろうと思っています。

丸山委員からもお話があったように、「環境首都」という言葉を使うことで、その実現に向けて取り組むように見えてしまうというのはその通りかもしれません。環境首都宣言ではエネルギーや循環型社会などの7つの柱を設定し、それに対する役割を記載しています。エネルギーという切り口で都市構造を考えるということがこの部会のミッションと理解していましたが、環境首都という言葉を使うことによって、エネルギー以外まで間口が広がったように感じています。

#### 【小林部会長】

『環境首都・札幌』宣言に関わった方にお話を聞くと「運動論」だとおっしゃいます。最初は意識を変えるという面でそれが必要だったのですが、時間がたつ中で、この部会

としては見える化が求められていると理解しています。5年間の地道な運動論をさらに展開して戦略化するためにどういう議論をすべきかということ視野に置いて、この言葉を使って、ビジョンの中で深化させていきたいと思っています。何をどうすれば環境首都になるかということがポイントになっています。

**【佐藤エコエネルギー推進課長】**

これからのキーワードがエネルギーなのだ理解しています。これまではふんだんにエネルギーがあり、それを如何に有効に使うかというところが論点でしたが、エネルギーの限界、震災を契機とした見直しなども含めて方向転換の仕方を考えるべきでそれを打ち出したいと思っています。そのためには行政の覚悟が重要で、これまでは受け身であったものから、エネルギーの創造、熱供給などの基盤の有効利用など、もう一步踏み込んで関わりながらまちづくりを進めることが求められるのでしょうか。

また、市民意識が変わりつつあることも視野に入れ、ライフスタイル等の形で市民に訴えていく必要があると感じています。

**【小林部会長】**

どこで展開するのがエネルギー戦略なのか、それを今後議論したいと思いますのでよろしくをお願いします。

**【長谷川みどりの活用担当課長】**

4つのネットワークの一つの柱としてみどりが位置づけられています。みどりの基本計画における考え方を踏襲した形で組み込んでいます。さらには今日の社会潮流を踏まえて新たな視点で取り組むべき内容を盛り込んでいるつもりです。

また、既存ストックの活用についても、単に作り出すのではなく、機能転換なども含めて現在の取り組みを踏まえて位置づけているところです。

**【小林部会長】**

計画まちづくり行政の在り方と合わせて緑の議論は重要になると思います。

**【坪田交通計画課長】**

総合交通計画としてすべての交通モードについて内容を取りまとめており、それも踏まえて庁内議論を進めています。集約型都市構造を支えるうえで、公共交通ネットワークを支えていく必要性、路面電車の活用とループ化、延伸について触れています。

都心アクセス強化の重要性についても位置づけており、また、対策型の観点から自転車についても取り上げ、交通として今後重要とされる事柄をビジョンとして位置付けているところです。

**【奥村都心まちづくり課長】**

都心については、内部でいったん議論を進めており、現在の形で取りまとめています。エネルギー有効利用都市のモデルとしての取り組みを進めることを位置づけながらも、一方ではエネルギーネットワークの普及についても課題として認識しています。

都心における集約型都市構造のモデルづくりとして、都心ならではの集約化の在り方について検討を進めています。

創成川以東については低炭素型の集約型市街地としての在り方を検討すべく議論を進めています。

**【丸山委員】**

市民と一緒に取り組む覚悟というよりも、もう一歩進んで市民と一緒になければ取り組むことができないことということが強調されたように感じています。

もう一つ、入れ込めないかと思っていることがあります。環境教育推進計画の中で対象として子どもたちが位置付けられています。小学校、中学校、幼稚園、保育園といった子育て施設の環境をまちづくりの中で作っていく、子育て環境づくりを重点的な施策の中に入れ込んでいくことは出来ないかと思います。これからの札幌を作っていく子どもたちが対象であることと、豊かな自然環境の中で子育てをしたい、若しくは育っていききたいと思う親子が多いということで、こういうところをイメージできるものが入らないかと思いました。

**【田村委員】**

どんな計画でもぶつかるところにぶつかっているような気がします。総合計画と部門別計画の調整が難しいということです。財源の確保の上では、総合計画に乗らないと部門別計画が進まないということがあります。一方では事業自体は部門別に予算が確保できれば遂行できるということもあります。各部局の計画を出してきてまとめているように思えます。それでは総合計画にはならないと思っています。外側の仕組みをうまく設けて部門別の調整をしていかないことには難しいのではないのでしょうか。

札幌を如何に良くしていくかということに対する固定概念があり、既得権の打破等、各部局から他の計画にも口を出していくくらいの姿勢が必要だと思います。

**【小林部会長】**

もう少しわかりやすく、何をどうすればよいのでしょうか。

**【田村委員】**

9 ページ目の交通の所で、「集約型都市構造を支える交通ネットワーク」がありますが、

これは交通で作った計画の中にある内容ですね。それをお願いしたのは分かりませんが、総合計画に反映する過程で如何に落とし込んでいくかという際には、土地利用や都市計画を含めて「そちらで調整してきてください」と言わないと図中に反映されないということがあるのではないのでしょうか。これを交通サイドから積極的にネゴシエーションすることによって書き込んでもらう。必ずトレードオフになりますので、残念ながら書きこまれなかったものについては、例えば都市計画サイドからダメということになれば、マスタープランに位置付けたものが実現できないというくらいの覚悟で自分達がネゴシエーションして回らないとならないのではないかと思います。

もう一つ、デザインということが非常に重要で、一枚の絵を見たときになるほどという奥行き感が必要になります。シンプルではありながらもよく見ると必要なものが書き込まれている、そういう状況には至っていない。7章は図面ベースで議論して、一枚ですべてを語れるようなレベルに持っていくということが、計画を作る人間の意気込みが感じられるものになるのではないのでしょうか。

#### 【小林部会長】

上位計画としてどうするか、各部局との調整の在り方が大事だと思います。図については部会の方では全く吟味していないので、今後の課題になるかだと思います。奥行きはともかく、意味深いものにしていきたいと思います。

#### 【志済委員】

第7章が空間に戦略を落として将来像を示す重要なパートになるかだと思います。3つのレンジを定めて書くことで、空間の実現の仕方、きめの細かさも違ってきます。違う視点で進めながらも最後には一貫性のあるものになるというタフな作業をすることになると感じています。

広域的には札幌市の生き残り戦略が描かれることになり、様々な環境分析、都市の強みを押さえながら如何に実現していくかということが必要でこれは企業も同じです。今後、深掘していくにあたって、正しいデータに基づいて議論することが必要になると思います。人の流れ、経済の予測、環境の将来などを予測しながら札幌の将来を決めることが必要だと思っています。そういった数値的な要素を盛り込んでいく必要があるのではないのでしょうか。

これはミクロな部分においても同じではないのでしょうか。数値を持って都市の方向性を決めていく、検証していくための作業が必要になると感じました。

#### 【小林部会長】

先ほど、途中でお話ししましたが、部会としてはベストな議論をしてないということが皆さんの共通認識だったかと思います。また、他部会が開催されているのは知ってま

すが、例えば観光産業については経済部門から出てきているのでしょうか、コンベンションセンターを整備した背景はいろいろありますが、それを支える機能を都心に持ってくるといふ宿題をあわせ持ちながら整備してきました。

MICE の拠点としてどこに考えるか、あるいは経済部会でそれについて議論しているのかという部分がわからない。また自然資源との関係を如何に捉えて MICE の価値を高めていくことを検討しているのかなどもわかりません。そういう部会間のやり取りを直接的、間接的にでも進める必要があるのではないのでしょうか。

コミュニティについても、ある時期、まちづくりセンターを札幌市が位置づけた際に、言葉としては「センター」といいながらも実態としては街を支える機能を有していない。まちづくりがうまくいっているイギリスなどでは、自分の近隣にとどまらず広域的な支援もするために、CABE（ケイブ）というシステムを導入しています。地域の問題を解決しながら、価値観や水準を広域的な視点で広めているということがあります。

札幌はケイブというシステムを導入してはどうかという議論を以前、したことがあります。そのスキルとしてコミュニティセンターを何とかするというところで短絡しているようにも感じています。

そういうやり取りが必要で、部会同士の情報が10階という仲人がいなければ成立しないという状況に陥っているように思います。

7章の醍醐味は様々な事柄を受け止め、盛り込んで対外的に示していくことにあります。そのための体制やネットワークづくりに期待したいと思います。

先日、資料を整理していたら、20年前の資料で東北地区という地区のまちづくりの資料が出てきました。東北地区というのは苗穂や創成川以東というエリアで今日まで議論されています。それが計画の中で位置づけられたことがなく、20年間はなんだったのかと感ずるところがあります。札幌として光るものをどこで実現していくかという議論が必要になるかと思えます。

コミュニティについても住区整備基本計画というものがかつて策定され、小学校と公園が隣接して計画的に配置されている都市は札幌を除いて他には事例がありません。これからこれを如何にバージョンアップするかということが議論されていません。住区整備基本計画のニューバージョンを示すのであれば、もう少し意味深いものにしなければなりません。地下鉄沿線についても容積緩和しながら誘導するのか、公営住宅等で担保していくのかなど、そこまで踏み込んだ議論が必要になるかと思えます。そういうことを含めて今後巻き返しをしてほしいと思います。

ほかに何もなければ本日の部会はこれにて終了としたいと思います。

以上